

「20世紀少年—第2章—最後の希望」 ★★★★★

2009（平成21）年1月6日鑑賞〈東宝試写室〉

監督：堤幸彦
 原作・脚本監修：浦沢直樹『20世紀少年』（小学館ビッグスピリッツコミック刊）
 オッチョ（落合長治）／豊川悦司
 ユキジ（瀬戸口雪路）／常盤貴子
 遠藤カンナ（キリコの娘、ケンチの姪）／平愛梨
 ヨシツネ（皆本剛）／香川照之
 サダキヨ（佐田清志）（ケンチの同級生）／ユースケ・サンタマリア
 蝶野（新米刑事）／藤木直人
 マルオ（丸尾道浩）／石塚英彦
 モンちゃん（子門真明）／宇梶剛士
 ヤマネ（山根昭夫）／小日向文世
 角田（漫画家）／森山未來
 春波夫（国民的演歌歌手）／古田新太
 高須（“ともだち”の部下）／小池栄子
 小泉響子（カンナの同級生）／木南晴夏
 キリコ（遠藤貴理子）（ケンチの姉）／黒木瞳
 ケンチ（遠藤健児）（行方不明）／唐沢寿明
 2008年・日本映画・140分
 配給／東宝

〈あまりにも多い登場人物につき・・・〉

最初から全3部作という構想も異例なら、製作費60億円は邦画では異例。しかも、その登場人物約300名は超異例。なぜ、そんなに多くの登場人物が必要なの？それは、映像化不可能と言われた浦沢直樹の原作があまりにも壮大な物語だから。

第1章は大阪万博を控えた1969年に秘密基地に集まる9人のわんぱく坊主たちが書いた「よげんの書」の紹介に始まり、2000年の「血の大みそか」で終わったが、その主役はケンチ（唐沢寿明）だった。しかし、第2章の主役は新顔のカンナ（平愛梨）。彼女はケンチの姉キリコ（黒木瞳）の娘だが、あの日以来行方不明となったケンチに代わってユキジ（常盤貴子）が世話をしてきた女の子。

そんなカンナが今や高校生になったのだから、第2章の時代は「血の大みそか」から15年後の2015年。2015年3月14日には45年ぶりに東京で“ともだち”が主催する「EXPO2015」が開催されることになっているうえ、「しんよげんの書」には「2015ねん、しんじゅくのきょうかいで、きゅうせいしゅは、せいぎのためにたちあがるが、あんさつされてしまうだろう」という不吉な予言が。さて、救世主とはダレ？そして、暗殺されるのはダレ？そんな、あまりにも多い登場人物たちによる壮大な物語につき、この第2章の評論も第1章に続きポイントだけに・・・。

〈“ともだち”支配はヒトラー以上？〉

第1次世界大戦の敗戦国たるドイツで、1920年の結党から1933年の政権獲得まで10年余の間に巻き起こったヒトラー旋風はものすごいものだったが、2015年の日本における“ともだち”支配はそれ以上・・・？

“ともだち”人気が小泉フィーバー以上に大爆発したのは、第1章のラストに描かれたあのシーンから。すなわち、2000年の巨大ロボットによる人類滅亡計画は最悪のテロリストであるケンチとその仲間が行ったものとされる一方、これを阻止した“ともだち”が世界の救世主と崇められたためだ。

〈思想上、宗教上の共通点は？〉

ヒトラーはユダヤを嫌いゲルマン民族優位の純血主義を貫こうとしたが、その発想は“ともだち”も同じ・・・？また、宗教の世界では常に未法思想が存在するが、“ともだち”の宗教観もそれと同じ・・・？つまり、日本国の思想的・宗教的な絶対権力を一手に掌握した“ともだち”は、「まもなく人類は終わりを迎える。私を信じ、私とある者だけが救われる」という予言を流し始めたからこりや恐い。

「オウム真理教」の信者は広まらなかったからよかったものの、この“ともだち”現象は私の目から見れば当然、カンナたちの目から見ても、何とか打倒しなければならないターゲット。

〈あの仲間たちは今どこで、何を？〉

そんな気持は、①今は行方不明だが、きっとどこかで生きているであろうケンチや、②カンナを育ててきたユキジはもちろん同じ。さらに、③幽閉されていた海ほたる刑務所をやっと脱獄したオッチョ（豊川悦司）も、④集団を率いて地下に潜伏しているヨシツネ（香川照之）、④国民的歌手春波夫のマネージャーをしながら、反撃の時を待っているマルオ（石塚英彦）、⑤病気と闘いながら、今なお“ともだち”について独自の調査を続けているモンちゃん（宇梶剛士）など、秘密基地の仲間たちも同じはず。第2章では新世代のカンナと共にこれら潜伏組の旧世代が、“ともだち”支配に対してさまざまな分野でさまざまな抵抗を。

さて、ヒトラーの全盛期を上回る“ともだち”支配が続いている今、彼ら彼女らはどこまで有効な抵抗運動を続けることができるのだろうか？

〈第2章の新顔は？ その1〉

第2章に登場する新顔は、主役のカンナ以外にもキャラ豊かな面々が多い。第1は、ケンチの同級生でカンナの通う都立新大久保高等学校に赴任してきた英語教師のサダキヨ（ユースケ・サンタマリア）。彼もケンチたちの同級生だが、当時いじめられっ子だったいつもお面を被っていたあの気弱そうな男の子・・・？第2章で出演機会を得た奇才ユースケ・サンタマリアが、堤幸彦監督の要請どおりの怪演を！

〈第2章の新顔は？ その2〉

第2は“ともだち”の忠実な部下で反抗分子を洗脳する施設「ともだちランド」の責任者である高須（小池栄子）。彼女はいわばナチスヒトラーの親衛隊長として有名なハインリヒ・ヒムラーのような存在。シリアスな演技で、日本アカデミー賞主演女優賞モノと私が絶賛した『接吻』（06年）（『シネマルーム20』126頁参照）とは全然違うユーモラスな演技ながら、洗脳された人間の狂気のサマを見事に演じている。

〈第2章の新顔は？ その3〉

第3はカンナの同級生の小泉響子。どこかで聞いたような人気歌手の名前にふさわしいインパクトのある表情と演技が要請されるこの役に抜擢されたのは、「浦沢直樹さんの漫画に出てくる顔だよ」って言われていたと自認する、1985年生まれの大阪府出身の女優木南晴夏。何よりも目チカラによって3000人のオーディションの中、原作者浦沢直樹、監督堤幸彦から「彼女しかない！」と太鼓判を押されたカンナ役の平愛梨とは全く雰囲気の違いな演技だが、平愛梨とは実にいいコンビ。2015年以降こんなちょっとかわった女の子たちが、“ともだち”支配の日本を改革していくのかと思うと、その時に生きていたら66歳となつていう私としては大いに楽しみ・・・。

〈1970年VS2015年、「太陽の塔」VS「ともだちの塔」〉

日本が100年に1度という経済不況に陥っている2009年初頭の今、大阪万博の1970年をふり返ってみると、何と明るく前向きな日本だったろうと感無量。麻生総理は「全治3年」と宣言しているが、それを信じている国民は誰もいないはず。現在のような政争に明け暮れる政治状況では、2015年の日本は経済・外交・軍事・教育などあらゆる分野で国際的に劣化しているはずだ。

この映画で堤幸彦監督は、1970年を頂点とした昭和の良き時代を思い出させるべくさまざまなアイテムや事件を提示しているが、これは2015年の若者たちにその良き時代を知ってもらうため。もちろん、それを知ることは大切だが、もっと大切なことはそこから新たなものを作り出していくこと。大阪万博のテーマは「人類の進歩と調和」だったが、これは今考えても時代的にピッタリ。またその象徴が、『シネマルーム16』の表紙を飾っているあの「太陽の塔」。しかして、「EXPO2015」のシンボルは「ともだちの塔」だが、これは「太陽の塔」を考案した岡本太郎氏から著作権侵害だと訴えられても仕方ないような完全な模倣品。これを見ると“ともだち”の芸術家スタッフのレベルが知れようというものだ。また問題児とされたカンナと響子が思想矯正のために送り込まれる「ともだちランド」も、どう見ても1970年のエキスポランドの延長線上の発想で、あまり進歩が見られない。

〈三波春夫VS春波夫〉

さらに、完全に大阪万博のパロディのお楽しみとして登場するのが、劇団☆新感線出身の古田新太演ずる国民的歌手春波夫。三波春夫の『世界の国からこんにちは』は、何でも前向きで上昇しか考えられない時代状況の中わが世の春を歌ったから、あんな能天気でバカ陽気なものでよかったが、経済不況が進み国民生活も国際的地位も低下し続けている2015年の日本で、春波夫が歌うあんな底抜けに明るい『ハロハロ音頭』がホントにヒットするの・・・？

〈今やローマ法王も“ともだち”のお友達・・・〉

第2章の撮影はニューヨーク、ロンドン、パリ、ローマ、北京、リオデジャネイロなど世界各地に及んだ。そのためスクリーン上にはタイムズスクエア、トラファルガー広場、エッフェル塔、サン・ピエトロ寺院、天安門、コロコパードの丘等の有名な風景が映し出される。また、第2章のエキストラ参加人数は総数16000人とのこと。60億円の製作費をふんだんに使っただけの価値のある映像だが、これは経済的には強くと思想界や宗教界では世界から問題にされない日本だったにもかかわらず、今や“ともだち”がローマ法王と会見するほどの世界的権威になったことを全国民に見せつけるものだ。

〈第2章のハイライトは？〉

映画後半のハイライトは、今や世界最大の危険地帯にまで「格上げ」された新宿歌舞伎町に“ともだち”が視察に現れるシーン。「しんよげんの書」には前述のような不吉な予言があったが、そんなヤバイところに“ともだち”が出かけていって大丈夫？

来る1月20日にはアメリカの首都ワシントンでオバマ新大統領の就任式が行われるが、その警備の厳重さは想像を絶するもの。それは、彼の命が世界の命運を握っているためだ。そう考えると、万一そんな視察の中“ともだち”が暗殺でもされたら・・・？多分第2章はそうなるのだろうと予想されるが、さてその展開は？

〈イエス・キリストの承諾は？ローマ法王のオーケーは？〉

私が全く予想しなかった第2章の壮大性は、イエス・キリストの復活になぞらえたストーリー展開。ローマ帝国によって捕えられ磔にされて死亡したイエス・キリストが、3日後に復活したことをあなたは信じる？そしてまた、その事実をあなたは認める？それがキリスト教信者とそうでない人の最大の相違点。またそれがヨーロッパ社会と日本社会との根本的な相違点。

キリスト教（信者）にとつてのハンディキャップは、情報の公開性の相違。つまり、磔にされたイエス・キリストの復活に立会い、目撃した証人の数が少ないということだ。その後弟子たちがその様子を口々に伝え、文章に書いて布教していったが、もしリアルタイムでのその映像が残っていればイエス・キリスト復活の証明力はより強くなるはず。ところが、2015年における情報公開力の大きさは段違い。

もし世界の首脳が列席する中、暗殺されて死亡したはずの“ともだち”が復活するとしたら・・・？それは、“ともだち”がイエス・キリスト以来の“神の子”であることが何百万人、何千万人も目撃証人の前で証明されること。しかし、もし第2章がそんなシナリオだとしたら、それはイエス・キリストの承諾が必要では？またイエス・キリストが姿を見せないのなら、少なくともローマ法王のオーケーが必要では・・・？

〈ケンチはどこに？第3章の展開は？〉

第2章ではカンナと響子の頑張りが焦点だが、2015年の今還暦近くとなった“昔の少年たち”が実質的な抵抗運動の核。カンナを助け応援するのが地道な活動を続けてきたヨシツネだが、漫画家の角田（森山未來）を連れて海ほたる刑務所を脱獄したオッチョが相変わらず型破りの風貌で大舞台に登場し、大活躍するからそれに注目！そんなこんなオールスター大活躍とテンポ良い展開にきれいなサッパリ忘れていたのが、第1章の主役だったケンチ。そんな第2章では、忘れ去られた過去の英雄ケンチが第2章のラストに少しだけ登場するが、さてその舞台は一体どこ？また、彼はこの15年間一体何をしていたの？そして終章となる第3章で新たにどんなドラマが待ち受けており、どんな結末に？第2章でも登場した“ともだち教団”を支える友民党のボス万丈目胤舟（石橋蓮司）は今なお健在だし、高須たち教団のスタッフの結束も固そう。しかし第2章で、中年の星として“ともだち”への抵抗運動を続けている秘密基地の仲間たちもまだまだ健在。そこにリーダーたるケンチが復活してくれば・・・。そんな期待をもって、09年秋公開予定の第3章の完成を見守ろう。